様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１１５

研究課題名（和文）神田本を中心とした『太平記』の生成と表現世界に関する研究

研究課題名（英文）An Investigation of The Generation and Expression of Kandabon Taiheiki

研究代表者
和田　琢磨（WADA, TAKUMA）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３６６９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究では、神田本などの古い形態を保った『太平記』を中心に取り扱った。また、『太平記』の享受についても研究し、絵巻物など江戸時代の作品について検討を加えた。
　前者については主に２点の観点から考察を行った。（１）『太平記』の諸本を調査し、文献学的に本文の研究を行った。（２）神田本を中心とした『太平記』の古態本の表現性を追究した。同様に、後者についても主に２点の観点から研究を進めた。（１）江戸時代の「太平記」という名を書名に含む作品の検討から、江戸時代における『太平記』のイメージを考えた。（２）未紹介の『太平記』と関わりの深い絵巻物を紹介し、その内容について検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：In this study,I have dealed with old form of Taiheiki,such as Kandabon-Taiheiki.And I have researched report on acceptance of Taiheiki in the Edo period.
I have discussed in terms of two main former.(1)Text study and investigation of various books.(2)Study of expression of old form of Taiheiki.The same applies to the latter.(1)Study of Work in the Edo period,including the named Taiheiki,in order to clarify the image of Taiheiki in the Edo period.(2)Introduction of picture scrolls of Taiheiki of non-refernal,such as Nankouichidaiemaki.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：太平記　中世文学　軍記物語　絵巻物

１．研究開始当初の背景

『太平記』をはじめとする軍記物語の大きな特徴として、様々な種類の伝本（諸本）の存在があげられる。現存諸本の比較分析を通して、作品の生成や享受の様相が見えてくることがしばしばある。したがって、諸本の把握は軍記研究にとって極めて重要な問題である。さて、『太平記』の諸本分類は 1975 年に鈴木登美恵氏により提示された 4 分類が現在の基盤となっているが、この分類では捉えきれない問題も指摘されはじめ、『太平記』の諸本分類は徐々に修正を加えられる時期にきている。

現在、『太平記』諸本は甲・乙・丙・丁に分類され、甲類が古い姿を留める古態本に相当する。古態本はさらに、神田本系・玄玖本（神宮徴古館本）系・南都本系・西源院本系の 4 系統に分けられている。

このうち、現在の中心となっているのは活字公刊されている神宮徴古館本である。この評価が定まって以降、古態本の研究はあまり進んでいない。申請者の問題意識からすると、神田本や西源院本の研究が等閑視されているという問題がある。それは、この両本が、甲類の中では改訂が施された後出性が認められる伝本であるためではないかと考えられる。だが、神田本には古態本を考える上で無視できない要素が含まれているのである。

すなわち、神田本の改訂が加えられていない部分は『太平記』研究上極めて重要であると考えられており、その認識は研究者間の共通認識となっていると思われる。それにもかかわらず、その研究は十分になされているとはいいがたい。

２．研究の目的

『太平記』の生成について具体的に伝える資料は『難太平記』しかない。その検討を一応済ませた申請者としては、『太平記』の表現世界を分析し、内部徴証の検討から『太平記』の生成を考えることが、もっとも有効な手段であると考えている。

以上のような問題を考えるには、古態本を軸とした『太平記』の本文異動を整理し、その差異の考察から『太平記』の表現性を具体的に明らかにする作業が不可欠となってくると考える。その際、長谷川端氏（『神田本太平記』汲古書院、1972 年）がその重要性を指摘して以来、本格的に取り組まれることがなかった「原態神田本」（現在の神田本から改訂された部分を除いた本文のこと。改訂箇所の指摘は長谷川氏によってなされている）の検討が是非ともに必要なのである。「原態神田本」が『太平記』の古い姿を知る上で極めて重要であろうという認識は、広く認められている。それゆえ、この 15 年ほどの間に飛躍的に進歩した諸本研究の成果を踏まえ、本格的に検討する必要があると考える。また、申請者は、神田本の書き込みを分析することで、室町期の本文流動の一端が具体的に判明するという見通しを持っている。しかしながら、この研究はいまだになされていない。可能な限り書き込みの検討も行い、神田本の全体像を考えたい。

３．研究の方法

本研究は着実な文献学的研究すなわち原本調査を行った上で、『太平記』の表現世界を分析するものである。したがって、所蔵機関で原本を調査させていただく。その際、『太平記』は 40 巻にも及ぶ大作であるため、写真を撮らせていただく必要がある。本文校合や検討はこの写真資料を用いて行う予定である。ただし、絵巻物ほかの新出資料については、申請者が管理しているので、原本をそのまま研究することになる。

本研究は 3 年間を予定している。1 年目に神宮徴古館本系本文の整備・検討、2 年目にその成果を利用しつつ、神田本の中の古い本文（「原態神田本」）の検討、3 年目に神田本の書き入れ本文の検討、を中心に行うことを予定している。表現世界の検討は本文研究と

連動させて行うつもりである。また、申請者が 10 年ほど行っている龍門文庫本の調査も継続して行う予定である。

４．研究成果

以下、各年度ごとに成果をまとめて記す。

23年度の実績は大略以下の2点にまとめられる。（１）神田本などの古態本『太平記』を中心とした表現世界の研究。（２）『太平記』および『太平記秘伝理尽鈔』の享受に関する研究。

（１）については、 作品の擱筆部分の位置付けの論文を発表したほか、冒頭部分についての研究発表も行った。擱筆部分についての研究は、「文学・語学」201 号（査読雑誌）に投稿し、掲載を許された。 これは、 表現世界の問題と作品の成立期の時代環境とを関連付けて論じたものである。 また、 冒頭部分については、 「序」 の研究史を整理し、これまで見落とされてきた研究史をも取り上げ再評価することを通して、 「序」 がなぜ置かれ作品内で如何に機能しているのかという問題について考察した。『太平記』 の研究史を整理している点でも重要な考察であると考える。

（２）については、23 年度に行う予定ではなかった。 しかしながら、調査の過程で、これまで注目されてこなかった『太平記』の絵巻に出会い、検討の結果、『太平記』の享受を考える上で興味深いものであることが判明した。 具体的には、 『太平記秘伝理尽鈔』などの『太平記』評判書の影響を受けた珍しい作品であることが判明したのである。そのために、 当初の予定を変更し、 この絵巻の書誌的な考察と内容の分析をすることにした。

24 年度は、（１）『太平記』の叙述の分析から作品の特徴を抽出すること、（２）『太平記』の享受の問題、（３）学位申請論文の執筆、の 3 点を中心に研究を進めた。

（１）の成果は、 「『太平記』 「序」の機能」 （「日本文学」61-7）に発表した。この論では、従来見過ごされてきた論文にも目を配りながら 「序」 の研究史を丁寧にまとめ、 その上で「序」 が作品の中で現世を映し出す役割を果たしているという新視点を提示した。

（２）は、これまで注目されてこなかった『楠公一代絵巻』を翻刻し、この絵巻が『太平記秘伝理尽抄』の影響も受けた、従来知られている『太平記』絵巻とは性格の異なる作品であること、「元禄八年」 という半ば通説化していた成立年次は再考すべきであること等を、実証的検証から明らかにした。この成果は、 「翻刻 楠妣庵観音寺蔵『楠公一代絵巻』上巻／下巻」 （「亜細亜大学学術文化紀要」21 ／22）に発表した。その他に、「「太平記」を纏う物語の展開―実録『慶安太平記』を軸として―」 （『もう一つの古典知』勉誠出版）において、近世文学を代表する実録小説『慶安太平記』の検討から、この作品が『太平記秘伝理尽抄』を踏まえて作品世界を形成していることや、 『慶安太平記』をパロディ化した作品『太平気』についても取り上げ、近世社会における『太平記』の多様な享受の様相について明らかにした。（３）は、これまでの成果を踏まえて、20 本の論考をまとめたものである。 「『太平記』生成と作品世界」と題し、 早稲田大学に提出した。その他に、加能越文庫にも調査に行った。

25 年度には、神戸大学付属人文図書館蔵『太平記』 （釜田喜三郎氏旧蔵本）や阪本龍門文庫蔵豪精本『太平記』 といった丁類に分類される伝本調査を行った。 これにより、 『太平記』諸伝本の本文異同についての調査をさらに進める環境を整えることができた。 また、 神田本『太平記』本文ときわめて近いとされてきた京都の仁和寺蔵本も調査した。 その結果、 神田本と類似した本文を有する一方で、 異なった本文をも有することが確認され、 これまでの指摘を一

部修正する部分を発見することができた。この成果を含めた内容は、8 月に開催された太平記国際集会（於；法政大学）において発表したので、それを補訂した論考を発表するつもりである。論文としては、「近世における軍記物語絵巻の一様相」（『絵が物語る日本』、2014 年 3 月）において、先年調査した楠妣庵観音寺蔵『楠公一代絵巻』についても検討を加え、当該絵巻の性格についてこれまで以上に明らかにすることができた。本年度において、仁和寺蔵本を調査することにより、神田本『太平記』の性格を明らかにする対校本文として利用できる部分とそうでない部分とを知ることができたことが重要であると考える。

全体としては、様々な成果を上げることができたと思うが、その一方で、東日本大震災の影響や申請者の校務・転出等の職場環境の変化、および資料所蔵者の御都合などもあり、予定していた資料を調査できないものもあった。これらについては、引き続き研究を続けていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
① 和田　琢磨、翻刻　楠妣庵観音寺蔵『楠公一代絵巻』下巻、亜細亜大学学術文化紀要、査読有、22、2013 年、pp1-8

② 和田　琢磨、『太平記』「序」の機能、日本文学、査読有、61-7、2012 年、pp55-65

③和田　琢磨、「太平記」を纏う物語の展開――実録『慶安太平記』を軸として――、アジア遊学　もう一つの古典知　前近代日本の知の可能性――、査読無、155、2012 年、pp120-131

④和田　琢磨、翻刻　楠妣庵観音寺蔵『楠公一代絵巻』上巻、亜細亜大学学術文化紀要、査読有、21、2012 年、pp1-10

⑤和田　琢磨、『太平記』の閣筆理由――細川頼之の管領就任記事の位置付け――、文学・語学、査読有、201、2011 年、pp23-34
〔学会発表〕（計 3 件）
①和田　琢磨、神田本『太平記』本文考序説―巻二を中心に―、太平記国際集会、2013 年 8 月 19 日、法政大学

②和田　琢磨、『太平記』巻一について、中世戦記研究会、2012 年 10 月 27 日、学習院大学

③和田　琢磨、『太平記』の「序」を考える、亜細亜大学経営研究所、2012 年 2 月 10 日、亜細亜大学

〔図書〕（計１件）
①和田　琢磨　他、三弥井書店、絵が物語る日本　ﾆｭｰﾖｰｸ ｽﾍﾟﾝｻｰ・ｺﾚｸｼｮﾝを訪ねて、2014、pp246-259

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
和田　琢磨（WADA,Takuma）
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：40366993